

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

無料

第91号

毎月発行

発行 2019年(令和元年)12月16日 月曜日

2019年(令和元年)12月16日 月曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、66歳、経営コンサルタント、趣味は縄文研究、今年1月に『東北先史時代学』を提唱、東北から日本を変えることを標榜。また縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。映像プロデュース事業にも進出。



列島文化と歴史を東北から再発掘する映像活動開始 第一弾 「鬼がつくった日本刀」撮影終了

「鬼がつくった日本刀」いよいよ撮影開始

撮影までの準備にもいろいろな細かなトラブルがあったが、とにかく十一月十六日と十七日の二日に亘る筆者第二弾の映像企画の撮影日を何とか迎えることが出来た。

いざ撮影場所の有備館駅に向かう電車のなかのスナップ写真ではみな意気揚々さぞや良い撮影ができるだろうとの予感を抱かせた。とはいえ、みな強烈な個性の持ち主である。どうやって東ねていけばよいか多少の不安はあったが、こまにきたらまな板の上の鯉の心境で望んだ。



出演者と撮影陣、筆者

岩手県立博物館所蔵の鍛冶神像の鬼で制作意図がより明確に

中鉢美術館入り口にある『鍛冶神像掛図』。正式名称は『紙本着色鍛冶神図』。撮影までに所蔵先の岩手県立博物館に撮影許可を得て、かつ鮮明なデジタル画像も送ってもらった。

より精度の高い画像をあらためて見て、今回の撮影から完成まで、この『紙本着色鍛冶神図』に描かれている鬼とされた古代奥州刀鍛冶たちが語りかけてくるのを感じ、その鬼たちに導かれての制作であることをあらためて思い起こした。

撮影月の前月の十月には、俘囚となって奈良まで連れて行かれた古代奥州刀鍛冶たちのことを思い起こさせるとても不思議で強烈な体験をしたばかりだった。そのためか、単に古代東北の歴史を探究するという以上の意義がすでに付加されていた。

すというのは、その時代に生きた人の息づかいまで掘り起こすことだと気を引き締めた。

日本刀撮影は長時間

撮影初日は終日、中鉢美術館内での撮影。

撮影隊は、カメラ撮影が特にむずかしいといわれる日本刀撮影に注力して行くつもりであることがうかがえた。プロとしてのプライドが感じられた。

展示されている日本刀は光を反射することだけで撮影がむずかしいのではない。複雑な曲面を有するため、周囲のもの、人の顔までがはつきりと映り込む。新たな日本刀の魅力に触れることができた。

これだけなかなか文章で表現するのはむずかしい。まじかに見ても、日本刀の見方を教わらなければ十分には分からない。だからこの日本刀なのだ。

名刀がぞろぞろ

撮影のために展示ガラス扉を開けてもらったら、出てくる日本刀はみなすごい名刀ぞろぞろということにあらためて気づく。ガラス越しに見ると、直に見るのとではまったく異なって見える。伝わる迫力が違う。

当新聞で何度か紹介した「閑寂(ふさちか)。古代東北三大鍛冶集団の舞草鍛冶がつくった舞草刀であり、銘のある最古の日本刀。この刀の迫力もすごかった。普通ならば、簡単に撮影が許可されないだろう。次が月山鍛冶による日本刀。刀身だけでなく、立派

な「こしらえ」がついており、重厚感が周囲を威圧する印象の日本刀である。妖刀といわれる「村正」も迫力があった。

徳川幕府に反逆の意思ある大名が所蔵していたため、幕府にとっては注意すべき日本刀という意味を込めて「妖刀」と言われたようだ。また「政宗」もすごい。かつて伊達政宗所蔵の脇差。これもいわれぬ魅力が放つている。

日本刀に至るまでの系譜を形成する蔵手刀、毛抜型太刀、直刀と日本刀の比較さらには中東にルーツを持つロシアアルタイ系のアキナケス剣など、次々に撮影した。貴重な体験であった。撮影隊が日本刀に魅力に取りつかれる

た。展示ガラスを開けての撮影にとどまらず、別室に日本刀を移動して、日本刀の魅力が全部引き出そうとして、あらゆる角度から撮影し、結果数時間を要した。

途中、中鉢館長からは日本刀は切っ先が命と切っ先を机に触れたことを注意された。なるほど、日本刀の切っ先とは日本刀の命なのである。

中鉢館長の解説が加わると、日本刀の魅力がより深く理解できる。最後に、許可が出たので筆者も日本刀を持ってみた。ズシリと重いのかと思いきや、軽いのだ。しかし、歴史の重みだけでなく、昨刀時の刀鍛冶の神がかった思いの重さが伝わったように感じられた。



中鉢美術館



撮影場所に向かう面々

東北の埋もれた文化と歴史発掘が始まる

想像以上に東北にはたくさんの埋もれた歴史が眠っている一掘り起こさなければならない



アラハバキ神社

二日目は剣神社から
撮影二日目は外での撮影だった。
最初は、古川駅から三分ほどの距離にある剣神社。ここには、三条小鍛冶宗近という著名な刀工が昨刀したという場所である。
もともとは奥州刀鍛冶であったが、京都に連れて行かれて後、時の天皇に昨刀を命じられたという三条小鍛冶宗近ゆかりの身洗池跡つまり昨刀の前に身を清めた場所からスタート。
すぐ近くには後になって建てられた剣神社があった。最初は宗近のことをいろいろ調べても京都の刀鍛冶ということしか出てこない。
中鉢館長に教えてもらうまでなぜ京都の刀鍛冶が宮城のこの場所に来て昨刀したのか分からなかった。
館長の説明で納得できた。宗近も俘囚なのである。奥州刀鍛冶なのである。それが京都に連れて行かれて、

また奥州に戻って昨刀を命じられたというのが真実である。

美豆の小島

美豆の小島はまったく知らなかった。知らずにいきなりの撮影となった。
美豆の小島とは、川の真ん中にあるほんの小さな小島なのだが、古今和歌集にも詠われ、後代に芭蕉も訪れるほど風光明媚な場所というのが表向きの和歌の意味で、裏にこの一帯の製鉄のことをいち早く都に知らせなければという意味が隠されているという。

和歌を詠んだ人はきつと密偵のような役割を担っていたのであろうか。
恐ろしい気な死人山
すぐ近くには「死人(しびと)山」があった。小さな山だった。
死人がいる場所だから近づいてはならないという意味で、わざわざ死人という

言葉は山の名前にしたのだが、実はここで製鉄を行っていた、誰も見てはならないという意味で名づけたと知らされた。

アラハバキ神社

その後、アラハバキ神社に行った。多賀城のアラハバキ神社には行ったことがあるが、大崎市の方のこの神社に来て、説明看板を見て、アラハバキ信仰というものが大分理解できた。
以前から知っていたアラハバキ神社と製鉄との深い結びつきを重ね合わせ、やはりこの一帯が製鉄に関連した地域であったことの証であることが納得できる。

玉造という地名

この一帯は、古代でも今でも「玉造」と呼ばれてい



死人(しびと)山

る。鉄に関連する地名である。玉ということでも玉鋼に通ずる。
日本刀の昨刀に必要な製鉄、鍛冶技術、鍛冶たちが居住していた場所なのである。近くには「鍛冶谷沢」という地名も残っている。何かのきつかけさえあれば、もつともつと製鉄や日本刀に関連した遺跡や遺物が地中から出現するのはまちがいない。

埋もれた歴史の宝庫

わが二日間の撮影だったが、いろいろなものを詰

め込みすぎて消化しきれなかろうか不安なところもある。しかし、何よりも、撮影するまでは予想もしなかったような、隠されてきた多くの歴史、埋もれてしまつた歴史が筆者に語りかけて来るのをひしひしと感じる。



美豆の小島



古今和歌集 美豆の小島



剣神社



三条小鍛冶宗近ゆかりの身洗池跡

表層の歴史が真実の歴史をおおい隠しているが、その真実の歴史を垣間見た以上、すべてをさらけ出す努力が課せられていることを強く感じた二日間の撮影だった。

力が課せられていることを強く感じた二日間の撮影だった。



第64回

水産業再興のための 料理レシピ紹介

【トマトスープパスタ(あさり)】

福今日の試作は、タイムの香りを使った、サバのトマトソースのせ。オリーブオイルでニンニクとトマトを炒めたソースが美味です。とても手軽に出来ました。(松本談)



郷土料理愛好家
松本由美子氏

—材料(2人分)— 乾スパゲティ 200g、トマトスープの素 80g、殻つきアサリ 100g、ニンニク 1/2片、パセリ 少々、ベーコン 40g、しめじ 40g、トマトカット 大2、水 240CC

—作り方— ① オリーブオイルでニンニクのみじん切りと鷹の爪1個(香りに移す程度)に炒める。② ベーコンを入れて炒め、続いて殻つきアサリ、しめじ、トマトスープの素、水を入れます。③ 次にトマトのカットしたものをに入れて蒸し煮をします。④ 7、8分茹でた麺を蒸し煮にしたトマトスープとボールで合わせからめます。この時に生クリームを入れる。⑤ 盛り付けにオリーブオイルをプラス(香り付けと照り)します。パセリをふって出来上がりです。*麺は、好みですが硬めに茹でると美味しいです。アサリ真空パックの冷凍品もありますので、利用するのも楽です。最近、チリ産の魚介類が多いですね。(松本談)

魚のさばき方サイトのご案内

最近、いろんな魚のさばき方を画像入りで詳しく解説してくれるサイトをたくさん見かけます。そこでそうしたサイトをいくつかご紹介します。その動画を見れば、むずかしそうだった魚のさばき方も簡単にできると思います。

『釣魚別のさばき方』

55魚種

釣り倶楽部というだけあって、釣った魚の捌き方が出ている。解説画面が大きく見やすい。すぐにでもさばきが出来そう。

Honda釣り倶楽部提供

<https://www.honda.co.jp/fishing/picture-book/clean/>

『つくる楽しみ』 魚の捌き方一覧

49魚種

数種類の貝類、さらにはホヤのさばき方まで掲載されている。日常料理はこれで大丈夫

「つくる楽しみ」提供

<https://ws-plan.com/gyokairui/sabakikata.html>

『魚のさばき方、 刺身の作り方』

22魚種

魚のさばき方にはじまり、刺身の作り方、盛り付け方に至るまでを解説している

ケنزキッチン提供

URLは長すぎるので別途検索願います



写真でお伝えする
東北の風景
釜石のラグビー

写真撮影 尾崎匠



二〇回目の「平泉文化フォーラム」にて平泉の世界遺産登録を考える

平泉に対する関心を喚起する場

「平泉文化フォーラム」という催しが年に一回、開催されている。「平泉文化研究の先端的な調査研究成果を公開する場」と位置づけられ、平成一二年度から毎年一月か二月に二日間の日程で開催されてきた。今年第二〇回という節目の年に当たり、記念大会として一月三〇日に一日のみの日程で開催された。

「柳之御所遺跡」の出土

「平泉文化フォーラム」の開始は、平泉の文化遺産の世界遺産登録と密接に関連している。最初に平泉の史跡を世界遺産にという声が出たのは平成九年のことだが、その声が出るにきつかけとなったのは、昭和六三年の「柳之御所遺跡」の出土である。この一帯が一閑遊水地の堤防と国道四号線バイパスの工事予定地となり、それに伴う事前の緊急発掘調査が行われた。その結果、予想だにしないか

つた建物の遺構や多数の遺品が出土し、これが北上川に削られて大半が失われていたと思われていた、奥州藤原氏の「政庁」であった平泉館、通称柳之御所の跡であるのではないかという話になった。

執筆者紹介

大友浩平

(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagmas/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>

当初は埋め戻して予定通り工事が行われることになっていたのだが、これに対して全国的な保存運動が起こり、平成二年には柳之御所遺跡保存に関する二〇万人の署名簿が当時の建設省や文化庁などに提出された。平成四年にはこの遺跡が平泉館であることが研究者らでつくる平泉遺跡発掘調査指導委員会による答申で明記されたこともあり、平成七年に遺跡を含む一帯を大きく迂回する形でバイパスルートが変更された。遺跡の保存を目的に当初計画が変更されたのは当時としては画期的なことであり、平泉の文化遺産が改めて注目されるきっかけともなった。

日本で初めての「登録延期」決議

この柳之御所遺跡の保存が高まった平泉の文化遺産への関心が、世界遺産登録への大きな原動力となった。とは言え、その歩みは決して平坦なものではなかった。世界遺産登録への第一段階としては、各国が概ね五年から一〇年以内に世界遺産へ推薦するために作成している「世界遺産暫定リスト」に登録されることが必要となる。「平泉の文化遺産」は平成一二年に文化財保護審議会の決定を受けて「暫定リスト」に登録され、翌一三年にユネスコ世界遺産センターの「暫定リスト」にも登録された。「平

泉文化フォーラム」はまさにこのタイミングで始まったことが分かる。その後、平成一七年に推薦資産が、中尊寺境内、毛越寺境内、柳之御所遺跡、無量光院跡、金鶏山、達谷窟、骨寺村莊園遺跡、白鳥館遺跡、長者ヶ原廃寺跡の九つに確定し、構成資産の周囲に緩衝地帯が設定されそのエリアの開発規制や景観保全を行うための景観条例も制定された。

「仏国土(浄土)」を表す遺産

このように日本で初めての「登録延期」という結果を踏まえて、推薦書が再提出されることになった。その中で、当初の構成資産を削減しなければ「普遍的価値の証明」をすることは困難という結論になり、当初の九つの資産について、二年後に再推薦して短期的に登録を目指す五資産と、調査研究をさらに継続した上で「拡張」により登録を目指す四資産とに区分されることになった。

難しい残る遺産の「拡張登録」

平泉の文化遺産については、先に述べた通り、「登録延期」になった際に除外された遺産の拡張登録が目指されている。当初、構成遺産にあり、登録延期となった際に除外した達谷窟、骨寺村莊園遺跡、白鳥館遺跡、長者ヶ原廃寺跡、そして、登録の際に除外された柳之御所遺跡の五つがその対象である。

構成遺産は「代表選手」

さて、今回の「平泉文化フォーラム」のテーマは、「平泉研究―平成から令和へ、課題と展望―」で、基調講演、報告四題、パネルディスカッションが行われた。このうち、平泉遺跡群調査整備指導委員会委員長で大阪府文化財センター理事長の田辺征夫氏による基調講演「日本の遺跡保存と活用、この三〇年―世界遺産―平泉―誕生の意義に寄せて―」で、氏は世界遺産としての平泉が誕生した

群」となった。これは前回のものより直截的で分かりやすい表現である。これであれば、複雑な「浄土思想」の説明ではなく、「浄土」とは何かだけを説明し、その浄土をこれらの構成遺産が表現していることを証明すればよいことになる。こうして再度日本としての推薦が決定し、平成二二年に現地調査が行われ、翌二三年、東北が東日本大震災による甚大な被害にさらされているさ中の六月二六日(現地二五日)、ユネスコ世界遺産委員会において、晴れて世界遺産登録が決議されたのである。

泉「仏国土(浄土)」を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」だからである。つまり、「仏国土(浄土)」を表す建築や庭園、遺跡でない、この登録名の世界遺産には加えることはできないわけである。ところが、これら五つの構成遺産は必ずしも「仏国土(浄土)」との関係が明確ではない。「仏国土(浄土)」を表す建築や庭園を残した奥州藤原氏の居館跡である柳之御所遺跡ですら、構成遺産になり得ないのである。ユネスコがこの登録名をかなり厳格に解釈している様子が窺える。そもそも柳之御所遺跡と骨寺村莊園遺跡を除く三遺跡はその奥州藤原氏との関連も明確ではない。それらを「仏国土(浄土)」との関連で登録してくれ、というのはかなり無理筋でないかと思われる。

外の遺産をどのように世界遺産の構成遺産と関連付けて伝えていくか、世界に向けて情報発信していくかというのを考えることの方がむしろ必要なのではないだろうか。今の平泉を取り巻く観光施策を見ると、「世界遺産に入らないと意味がない」とでも考えているように見えるが、決してそんなわけではない。田辺氏の指摘する通り、登録された五資産は「代表選手」であり、その代表選手の背後にはそれを支えるたくさんの選手が存在するのである。そもそも、世界遺産には「資産」と「緩衝地帯」が現在の平泉町内の大半が含まれるが、この活用という面はこれまでほとんど検討されていない。この点では、同じ東北の世界遺産である白神山地におけるアプローチが参考になる。一九九三年に東北初の世界遺産(自然遺産)として登録された白神山地は、登録区域は、森林生態系保護を目的として管理・保護されており、入山が制限されている。そのため、その周辺の緩衝地帯を、気軽に世界自然遺産に触れることができる場所として活用している。これに対して平泉では、緩衝地帯などほとんど意識されていない。ここに今後の平泉の可能性があるように思うのである。

いまあらためて、はじまりの岩手県の事

二〇一二年、本誌への拙稿の寄稿を始めて数回目に、私は二〇代半ばにおける岩手県遠野市への旅が自身のその後の「東北回帰」の始まりになった、というような事を書いた。それほどまでに岩手に運命を感じながら、より気候が温暖で都市機能の高い仙台への移住を選んだ事に対するいい訳してみた説明も。隣県在住者として絶妙な距離を取りながら時折折台から遠野、盛岡、岩手山や七時雨山、花巻、宮古、大船渡、平泉など各地を訪れて一〇年以上が経つのだが、正直なところ、仙台での私の生活はなかなか思うようにはならず、そうそう自由に行き来できて



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

いる訳でもない。このままの岩手との関係の形に限界も覚え、そろそろ違った展開が欲しいと痛感する今日この頃なのである。

思えば私が生まれ育った山形県から東京へ出るも、やがて「東北回帰」願望に取り付かれるまで実はそれほど年数は必要がなかった。いくつかの東北関連の書物に触れ、岩手県遠野市を初めて旅した頃、東京の知人で会津出身の四十代のピデオカメラマンに「岩手県は東北の中心的存在だと思おう」というような事を話して「どういう事？意味がわからない」と反発を買った事を記憶している。幕末の東北を象徴するかの如き会津と庄内の出身者同士で語る場であって、確かに唐突な話であり無理もない事ではあったが、あの発言は二十年以上経過した現在も、ある意味を得ていて、決して間違っていないと確信しているところがある。

あの頃、私は確かに地元・山形ではなく、同じ北東北である秋田でも青森でもなく、岩手県に魅かれた。しかも、単に一県としてではなく、東北の代表のようだったのだから。一種の過剰な、若気の妄想のようなものだったのだろうか。本稿では、個人的に「長

いつきあい」となる岩手県との関係に一石を投じたいと考える今こそ、自分にとって岩手とは何なのか、そして東北における岩手とはどのような存在なのかあらためて考え、当地の真価に迫ってみようと思う。

もう十数年前の事、ちょうど私が東京から仙台に移住したばかりの頃だったが、秋の盛岡市で開かれる「岩手芸術祭」にて地元盛岡出身で在住の小説家・高橋克彦氏と、氏による原作の大河ドラマ『炎立つ』で平泉藤原氏初代・清衡を演じた陸前高田市出身の俳優・村上弘明氏が対談するというのでこれを見たくて旅した事があった。彼らの終始興味深く、楽しい語りの中で特に印象的だった話がある。確か、村上氏が「東京から東北へ帰ってくると、ある地点を境に空気がガラリと変わるのがわかる。仙台では、まだダメなんです。やっぱり岩手に入った時なんですよ。」と語り、高橋氏も強く同意していたのだが、これは実は私も長年無意識のうちに実感していた事だった。

同じく盛岡出身・在住の作家でオートバイを愛する旅人としても知られる斎藤純氏によれば、空気がガラリと変わるのは「北緯四十四度」前後の地域。秋田県側は男鹿半島、岩手県側は八幡平周辺で、樹木の植生がこの辺りでかなり変化して、

どこか西欧的、北海道にも似た亜寒帯の様相を呈しているのがわかるのであるが、実のところ日本海側では山形県から秋田県へ移って空気が変わる、という感覚はあまりない。岩手県で覚える「空気が変わる」という感覚には、何か別の要因が関わっているのではないかと私は疑うのである。

近年、非常に意外で、且つ残念に思うのは、宮城県の人々の多くが東北の中で特に岩手県に対して驚くほど無知であり、無関心である事である。同じ隣県である山形県に関しては行楽地として蔵王山系を共有し、また蕎麦の名店については地元山形人よりも詳しく、わざわざ車で食へに出かけたり、芋煮や漬物、果実や酒など食に関しても宮城より上を行くと認めてすらいるように思える。また、山形県の日本海側は多くの宮城県民にとって夏の大きな楽しみでもあるようだ。

ところが、北方の岩手県には行楽地にしても、食にしても、ほとんど魅力に感じる要素がないようなのだ。その要因としては、いくつか考えられるだろう。まず、海はリアス式海岸で宮城県と共通の特徴を有しており、特に憧れの対象には成り得ない。食についてもはっと(岩手ではひつつみ)を始め共通点が多く、じやじゃ麺・わんこそばなど麺類も一癖あるものばかり

で万人に受け入れられると難しい。しかし何といつても大きいのは歴史的要因ではないだろうか。岩手と宮城、といえば南部氏と伊達氏が領土を争い、両者の文化も現在に至るまで大きな影響を及ぼしているが、その事では山形県もまた宮城にとつては、最上氏や上杉氏とも勝るとも劣らぬ攻防を繰り返した間柄である。となれば、やはり考えられるのは更に古代、「蝦夷」の時代に遡る因縁の歴史であろうか。

私の少年期、郷・山形県では「蝦夷」というと岩手あたりを昔、野蛮な民族がいたというような感覚で、呼び方も「えみし」どころか「えぞ」だったような気がする。現在でも同じとまでは言わずとも、岩手に関心のある山形人でも「蝦夷」に詳しい者がまだ多数派とはいえないだろう。

私が東京に出て行った九十年代は、アイヌ民族の今の姿を伝える書籍の出版や、高橋克彦氏による東北アイデンティティ表現の先駆けともいえる何作もの小説の執筆など、それまで顧みられる事なかった地方に脚光が当てられ、徐々に、時に急速に価値観の転換が為された時期であった。

録は、古くは現在の新潟や福島、そして山形、秋田、もちろん多賀城のある宮城にも存在するが、何といつても蝦夷といえは岩手、というまさに聖地のような位置づけと過言ではない。いや、ここで「聖地」と表現した事に、一昔前であれば驚愕と非難で対応されたであろう。だが、今や大和朝廷軍を幾度も打ち破り、敗走させたアテルイら蝦夷は郷土の英雄であり、その意味では非常に長らく「賊地」とされた岩手県が、今やかなり多くの人に「聖地」と認識されているのは間違いない事と思われるのである。この現地の感覚と、そのような蝦夷の系譜が平泉の栄華につながっているという事実を知るか否かで、岩手県に対する関心や好感度には格段な違いが示されるに違いないのだが、このような歴史の闇に埋もれた、見えづらい所に魅力が隠されているのが、岩手県の立ち所ともいえるのかも知れない。

さて、平泉の時代が終わった後、不思議な事に鎌倉、南北朝、室町、そして戦国、江戸期へと続く歴史の中で、岩手エリアが脚光を浴びる時代は容易に訪れなかった。戊辰・東北戦争においてさえ、矢面に立つのは会津・庄内そして盟主・仙台といった南東北地域であり、盛岡藩の存在感は決して大きくなかった。長い江戸期

の幾重にも渡る飢饉に疲弊した余波は明治以降にも引き継がれ、昭和の「日本のチベット」イメージにつながっていったのである。戦後から高度経済成長期に渡る時代、県全体に広がる山々と深い森林、それを取り巻く厳しい気候。それは山形、秋田、青森といった東北のみならず、信州・長野などにも共通の要素であったはずだが、「日本のチベット」が代名詞とされたのは、他ならぬ岩手県だったのである。日本中が高度成長の最中、一際開発が遅れ、古い信仰や因習も残っていた文字通りの「秘境」・つまり、最も開発が進んだ先進地・東京を始めとする中央の全く対極の世界として、岩手は存在したのである。

彼は同時期、東北新幹線が仙台や盛岡に開通する事を知り深い懸念を抱いていた。岩手・東北がネガティブな意味での「日本のチベット」のままではないはずはない。所謂「中央流」に浸

果たして、その新幹線が開通し、変貌を遂げて久しい東北に、それでも次の世代である私は魅かれ、「回帰」と称してJターン移住してきたのである。決して「気を弱らせた六部」ではない若者を引き寄せた、現代東北・岩手県の魅力。それはあたたかみ、結界や魔法で人々に気づかれぬように絡められていた封印が遂に解かれたかのようだ。

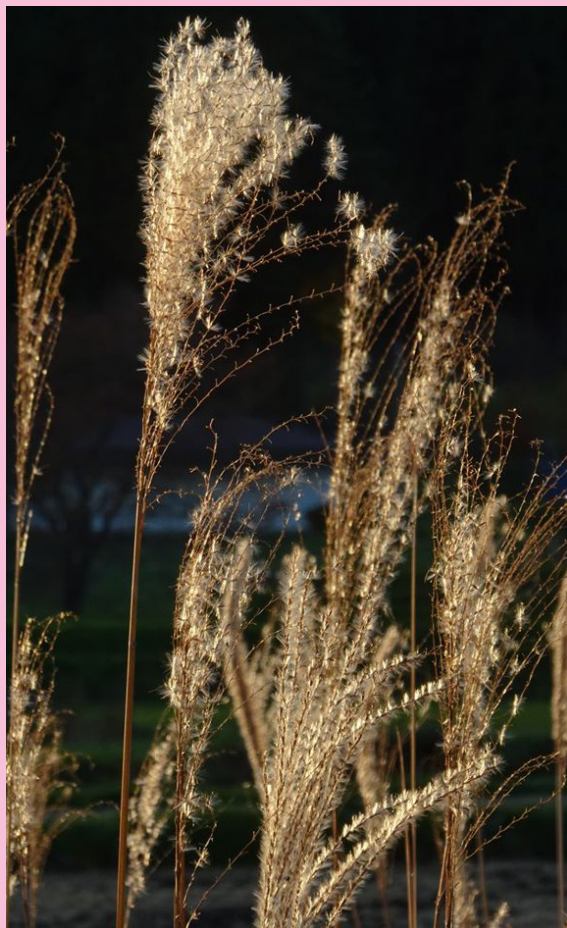
その封印があったとして、それを解いた術は何だったのだろうか、と考えると、真つ先に浮かぶ言葉があった。「イーハトーヴ」である。大正・昭和期の過酷な岩手の風土の中で、宮澤賢治が生み出した、郷土岩手県をモチーフにした空想世界それがイーハトーヴであると言われてきた。しかし、

この概念には謎がある。「何故、岩手だったのか」という謎である。単に苦しい現実からの逃避から生まれた概念ならば、全国どこからでも、様々な天才によって創出可能だったろう。私は、イーハトーヴを生んだ最も大きな要因が、最も巨大な、知られていない真実、認められていない価値を秘めた土地・岩手県にあったと考えているのだ。

岩手県に封じられた「蝦夷」という国家を覆しかねない存在の真実、平泉という人類恒久の平和の鍵を握る文明の価値がこの地より解放され、明らかにする事で初めて、東北全土が本来の姿を現し、イーハトーヴの解釈としてよく知られる「理想郷」を現実には追いつく事になるのではないか。その時、東北の中心は東北人一人一人の心の中にある。私も、そこに立って懲りることなく新たな道へ踏み出したいと思う。



まだ見ぬ東北への旅は続く 岩手山麓に



光る穂



石塔と柿



カラマツ紅葉



晩秋斜陽



ススキ

シリーズ 遠野の自然
「遠野の大雪」
遠野 1000 景より

今年もまた「立冬」がめぐって来た。月日の進行は、老いの加速とともにどんどん速くなるように感じる。今年、今年の大自然災害は大洪水をもたらした台風。予報が外れ、関東だけでなく長野県や宮城県に大きな被害をもたらした。いまでも被災に苦しむ住民がいる。気候変動のせいで台風が大型化したと大騒ぎするが、安定した自然などはもともとない。それは人間の勝手な願望にすぎず、常に変化に身構える必要がある。人間の思惑など気にも留めず、多少の変動を伴い列島の四季は進行する。その大きな循環が確実に回転することに、他の動物や植物とともに感謝すべきである。



杉木立と鳥居



百万遍 石塔



鳥居

古代の鉄を探索する旅 ⑤

東北への鉄伝来は朝鮮半島経由ではないのは事実
それどころか別の壮大なドラマがあったのではないか
それは「古代東北鉄王国」の存在ではないか!?



荒脛巾(あらはばき)神社

品「鬼がつくった日本刀」の撮影で、宮城県大崎市にある荒脛巾(あらはばき)神社を訪問したときに答えた糸口が偶然にも見つかったのだ。

* 荒脛巾神社

「荒脛巾神社」は現在、訪れる人もまれで、いなかの田んぼのまんなかにぽつんと立つ小さな神社であった。

住所は宮城県大崎市岩出山下一栗字荒脛巾百六十四番地。(住所も荒脛巾に留意)

では、「歴史的事実」を踏まえて、その後、東北そして日本列島で古代の鉄はどう展開したかをずっと考えていた。

とはいえ歴史文書などがあるはずはなく、探索の方法にも適当なアイデアがなかなか浮かんでこなかった。

しかし、この問いへの答えは、意外なところから提供されることになる。

実は筆者の二作目の映像作

に六百余社(存在した)

④ 平安期のアラバキ系中心王侯は…安倍氏が後裔…

⑤ (祭神は) 前九年の役後、改神あるいは合祀の憂き目にあひ…

⑥ アラバキ族の王城の地を西暦前に米山町朝来に、また西暦後多賀城へ、そして古川市宮沢(三〇二年)に移した

⑦ この地に一族集団が安住を求め守護神として祀ったもの(カッコ内は筆者)

神社に入っていくための小さな道の入り口に説明看板が立っていた。

その説明看板の一字一句を食い入るように見ていたら、驚くことばかりが記載されていた。それを列挙してみる。

① 祭神は二千年に及んで鎮座する産土神(うぶすなかみ)
② 古代先住民(荒吐族、荒脛巾族)の祖神、守護神
③ 古代の東北、関東の地

て、やがてほんのわずかを残して消滅した。

そのように書いてあるのだ。

* さらに、この「荒脛巾神社」と古代の鉄が非常に強い関連性をもつということが以前から言われてきた。

現にこの「荒脛巾神社」がある地域一帯は、古代東

この看板の記述によれば、アラバキ神は二千年以上前からアラバキ族の祖神、守護神として、少なくとも宮城県内に祀られていた。

そして古代の東北と関東に六百余社存在したほどに広く信仰された。

アラバキ族には王がいて、王城が存在していた。

前九年の役に登場する安倍一族はアラバキ族の後裔であるが、その戦いの後に、祭神としての荒脛巾神は、改神あるいは合祀され



荒脛巾神社の裏の古い石像

北の鉄産出の地のひとつである。

そうなるとその一帯に、いまから二千年以上前から鉄が伝わっていて、製鉄を行っていた可能性があり、それは朝鮮半島経由伝来の製鉄より古いということになる。当然、鉄伝来のルートは北ルートだ。

何ということだろう。

* それにしてもアラバキ族とは何者なのだろうか。

ネットで検索すると、「荒吐族」という漢字名で出てくる。

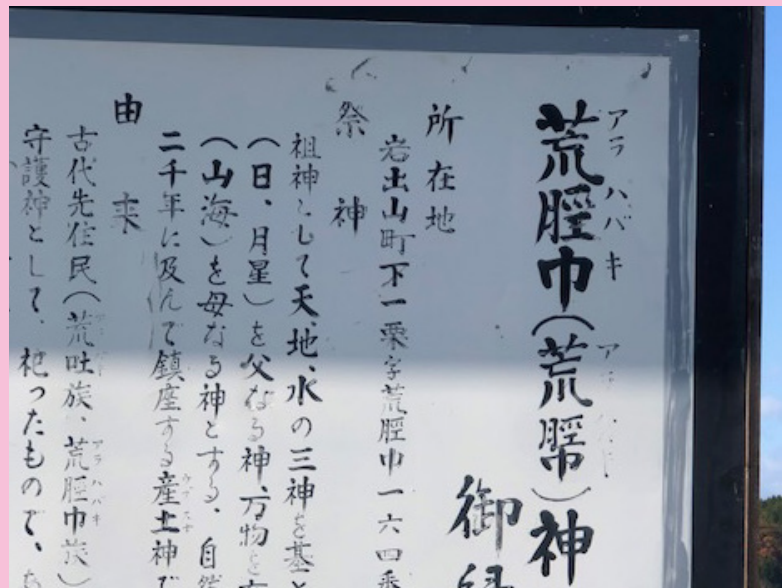
それによると、東北に縄文時代から住んでいた民族で、日本各地にその民族の名は見受けられ、アイヌ、蝦夷、熊襲、隼人などと同

種ともされ、さらには最も有名な人物として、荒吐東族首領・アテルイがいるという。荒吐族は遮光器土偶を荒吐神とし、信仰していたとされる。

こうなってくるともう歴史ファンタジーの一種である。史実の枠を超えている。そしてそこには、いまだ



荒脛巾神社説明看板



荒脛巾神社説明看板 拡大図



鍛冶谷宿駅跡看板

は偽書扱いされている「東日流外三郡誌(つがるそとさんぐんし)」の強い影響が見られる。

「東日流外三郡誌」では、アラバキを「荒羽吐」または「荒覇吐」と書き、遮光器土偶の絵を載せ、アラハバキのビジュアルイメージは遮光器土偶である、という印象を広めた。

偽書か否かの一大論争に発展して、最終的には偽書説が圧倒的に有力となり、アラハバキの信用性も一挙に地に落ちた。

埋もれた歴史を掘り起こそうとするものにとつては、大きすぎる弊害であり、障害である。

捏造であり、偽書である。まことに残念だ。

* そうした障害にもかかわらず、筆者は多くの「状況証拠」から、少なくとも、古代の宮城北西部において、大きな製鉄拠点があったことは史実だと考えたい。

そこからさらに発展して、古代の東北各地に製鉄拠点が存在していたことは容易に想像できる。

今後は、これまで述べてきたことをひとつずつ地道に検証して行こうと思う。そして、東北の埋もれた歴史掘り起こし活動の端緒にしたいと考える。